

一橋大学主催国際シンポジウム

東と西の対話——ポール・ヴァレリーの眼差しの下に

(一九九六年九月二十四日—二十七日) 報告

まえがき

一九九六年九月二十五日から二十七日までの三日間、一橋大学国立キャンパス佐野書院にて標題の国際シンポジウムが開催された。シンポジウムに先立ち、九月二十四日の夕方六時から、恵比寿の日仏会館で、評論家の加藤周一氏と国際交流基金の招きで来日したヴァレリー研究家のジュデイス・ロビンソン・ヴァレリー女史を演者に迎えて、一般公開の講演会が行われた。朝日新聞社の後援ということもあり、当日はホールが満席になる盛況ぶりであった。講演会後のレセプションも会話がはずみ、外国からやってきた総勢三〇名におよぶポール・ヴァレリー研究者との顔合わせの機会ともなり、シンポジウムの前

夜祭の役割を果たした。

本シンポジウムのメイン・テーマであるフランスの詩人・思想家ポール・ヴァレリーについて、詳細を知らない読者の参考にするため、シンポジウムが開催される一週間前(九月一七日)に読売新聞に掲載された拙文を左に写して置く。

「ポール・ヴァレリーが没して、今年は一〇一年目にあたる。このフランスの詩人・思想家は、生前の歩みも特異であったが、死後の半世紀におよぶ再評価の過程も並ではない。

ヴァレリーは、五〇歳に手が届く頃まで無名だった。

それが、一篇の長編詩(『若きバルク』)で一躍有名になり、あつというまにアカデミシアンになった。埋もれていた《超大型新人》は文壇の寵児となり、一九四五年に没すると、ド・ゴール將軍は、物心ともに荒廃していたフランスの戦後復興の象徴として、国葬の榮譽をもっておくれた。

死後のヴァレリーの再評価は、生前に書き遺された『カイエ』の刊行によって始まる。詩人になることを断念したヴァレリーが、二三歳の時から七五歳で没する直前まで、人間の《精神の機能》の解明のために、営々として書き続けた二六、〇〇〇ページにおよぶ膨大な書き物である。現代文学では、作者と作品、作者と読者、作品と草稿、表現形式におけるディスクールと断片の関係など、書くという行為の根幹にかかわる諸問題に新しい照明があてられてきたが、『カイエ』はそれらの問題に、時代に先駆けた実践として、貴重な示唆を与えるものである。自らの精神的営為が作品に収斂することを拒むかのようにして生涯の三分の二を過ごしたヴァレリーは、残りの三分の一の人生でさまざまなジャンルにわたる多くの作品を書いたが、生前から折に触れて「すべては

『カイエ』にあり、作品は注文に応えて書いた残滓にすぎない」と言っていたことを考えると、死後半世紀を経て、水面下に隠されていた巨大な塊の実態が明らかになるにしがって、ヴァレリーの素顔がようやく見えきつたように思われる。

一九世紀の最後の三〇年間と二〇世紀の最初の四五年間を生きた彼は、いわゆるモデルニテ(西欧技術文明)の栄光と悲慘を自らの目でつぶさに観察した人であった。産業革命の進展とともに大英帝国の隆盛と衰退を目のあたりにしたし、ドイツの台頭と脅威も身をもって感じ、世界大戦という人類史上未曾有の破滅行為に二度まで立ち会った。さらに、彼が生きた時代は《知》(物理学、化学、数学、生物学、医学、心理学、言語学などの諸科学)の枠組みが抜本的に組み替えられた時代でもあった。彼はそれらの文明や科学の問題に敏感に反応し、専門知によってではなく、日々の精神修練によって鍛えられた知力によって応えようとした。

ヴァレリーは、どんな問題に対しても、よく選ばれた自前の言葉で、問題の根源を吟味することから始める。知識が専門化し、諸科学の垣根が高くなるにつれ、人々

がもはや自分で考えることを断念して、現実の結果だけを享受したり、甘受したりしようになつてしまつたように見える現代にあって、ヴァレリーの思索の方法は示唆的である。他者の言葉、他者の観念を援用し、言うなれば知識の竹馬に乗って物を言うような態度を厳しくしりぞけ、愚直なまでに自分の立っているところから思考を始めるヴァレリーは、二〇世紀の大多数の知識人たちが多少なりとも取り込まれたマルクシズムやフロイデイズムに対しても超然として、けてして色に染まらなかつた。だからといって、彼が人間の社会の生産の仕組みや政治や歴史について考えなかつたとか、夢や意識や無意識について考えなかつたと思うのは早計である。名高い数編のエッセー以外に、『カイエ』にはそれらをテーマにしたおびただしいノートが遺されている。

諸科学に強い関心を抱いていたヴァレリーの思考の射程が時に並外れて深く、現代の一線の科学者たちを魅了してやまないことは、ルネ・トムやイリヤ・プリゴジン、ジャン・ベルナルといった人たちの証言によつても知られる事実であるが、いま一つヴァレリーの今日的意義を強調すべき側面をとりあげるとすれば、文明評論家と

してのそれであろう。二〇代に書いたエッセー「方法的制覇」で、ほぼ半世紀後の日独伊枢軸同盟を、第一次世界大戦後に出した「精神の危機」で、西欧の没落ととも、今日のグローバリゼーションとアジアの勃興を予告したヴァレリーは、マルクシズムの歴史観から自由なだけ、現代世界の歴史や政治に対しても柔軟で、含蓄に富んだ考察をのこしている。もちろん、ここでも、ヴァレリーの真価は彼の予言や予告にあるのではなく、対象に向かつたときの彼のしなやかな思考の運動そのものにある。それだからこそ哲学者のデリダが彼のヨーロッパ論を下敷きに『他の岬』を書いたのであるうし、年期の入つたヴァレリアンで精神科医の中井久夫氏が、筆者への個人的な手紙の中で、「冷戦後の世界で通用する数少ない思想家」とまで言われるのであろう。激動の二〇世紀もあと四年余りをのこすばかりとなつたが、世界中のヴァレリー研究者がこの極東の島国に参集して、彼の書き物の中に見えかくれする《東洋》に照明をあて、今日および近未来の世界の政治や文化あるいは人間の生き方などについて、率直な意見の交換を試みる今回のシンポジウムが期待通りの成果をあげることがを、組織の責任者と

して、切に願う次第である。」

以下は三日間にわたるシンポジウムの報告である。シンポジウムの各セッションの報告はそれぞれ司会役をつとめた者(末尾に署名あり)がとりまとめた。なお「まえがき」と「あとがき」は一橋大学の恒川が担当した。

九月二五日(水)

初日の朝は九時から簡単な開会式が営まれた。本学学長阿部謹也氏から挨拶があり、続いて、ポール・ヴァレリーの長男フランソワ・ヴァレリー氏からの長文のメッセージが、フランス国立図書館草稿部司書フロランス・ド・リュシー女史によって読み上げられた。

学長の挨拶は以下の通りである。

「前列席の皆さま、

本日ここに、国際シンポジウム「東と西の対話——ポール・ヴァレリーの眼差しの下に」の開会を宣言いたしますことは、わたくしにとりまして光栄かつ喜びであります。

ます。はじめに早朝より本会場にお集まり下さいました前列席の皆さま、とくに遠路はるばるこのシンポジウムに参加されるためにお越しいただいた外国人の方々、心からの歓迎の意を表したいと思います。シンポジウムは学問研究の成果を交換することが主たる目的であります。主たると申し上げたのは、そもそもシンポジウムが成立するためには、まず人の出会いがなくてはならず、シンポジウムの成功いかんは、いつにその人の出会いの質にかかっていると考えるからであります。これからさまざまな学問的な議論がポール・ヴァレリーをめぐって、またその「眼差しの下に」展開されるものと思えますが、どうぞ、時間の一部を活用して、学問とは直接関係ない、自由でフランクな意見の交換をし、相互の人間的理解を深めていただきたいと思います。

ポール・ヴァレリーの作品に、東洋あるいは極東がどのような位置を占めているのかわたくしは分かりません。しかし、大事なものは、これは外国から来られた方々に申し上げる事ですが、皆さまの東洋経験が皆さんの心の内部に新しい展望を開くことで、帰国されてから、これまで熟知しているつもりでいた作家の作品を新しい目で読

まれ、それによって新たな照明を作品に与えることであり、と思えます。もしそのような成果が得られるならば、このようなシンポジウムに期待される効用として、少なからぬ意義があると考えます。

最後に、外国から来られた方々に日本滞在が快いものであることをお祈りし、ご列席の皆さまにはシンポジウムの大成功をお祈りして、簡略ながらわたくしの開会の挨拶といたします。」

なおフランソワ・ヴァレリーから寄せられたメッセージについては本報告書末尾の翻訳を参照。

第一セッション ヴアレリーと東洋 I

司会 恒川邦夫(一橋大学)

シルヴィオ・イェシユア(テルアビブ大学)

1 ニコル・セレット(パリ第一二大学)「西洋批判」
 ヴアレリーは若い頃から現実世界の動向に強い関心を示したが、とくに日清戦争や米西戦争に注目し、後発の新世界が急速な近代化の努力により、西洋をやがて追いつ

越していくことを予測していた。その根本は、欧州の歴史的な栄光と現代世界における衰退の危機というシエーマでとらえられるだろう。西洋は地中海にはぐくまれたギリシャ・ラテン文明に源を発し、異文化と接触して養分を吸収し、幾多の発見・発明を積み重ねて、産業革命を遂行するに至って現代世界を切り開いた。しかし、西洋はそのようにして自らが開発し蓄積した《知》を管理する政策をもたなかったために、それらの貴重な《知》は無制限に世界中に拡散し、《知》の平準化をもたらすに至った。その結果、これまで《知》的に遅れていたアジアやアメリカが西洋に追いついてきた。そしてひとたび《知》的に肩を並べるようになると、アジアやアメリカはその広大な国土や稠密な人口の力によって、西洋を圧迫するようになる。ニーチェの言葉を借りて、西洋はアジアの「小さな岬」にすぎないようなものになる危険が指摘されるゆえんである。西洋(西欧)列強は植民地や市場をめぐる《兄弟喧嘩》を一刻も早くやめ、西洋を培ってきた《西欧精神》に立ち戻り、世界の頭脳としての歴史的な地位を守るためにも大きく団結すべきである。そのような大状況において世界の動向を眺めていたヴァ

レリーは、共産主義者の革命運動やスペイン市民戦争などには冷淡であった。その反面、現代世界が緊密な相互関係に裏打ちされた世界であることを強く意識していたことから、物事を国家という狭い枠組みで考えることの弊害をつとに訴えていた。冷戦構造とか、人道的犯罪といったヴァレリー亡き後の世界でクローズアップされる問題についても見通していたところがある。

2 シルヴィオ・イエシュア(テルアビブ大学)「鴨緑江の両岸から——ヴァレリーが鳥尾小弥太に負っているもの」

自らが四半世紀前に発表した論文を出発点として、その後、作品の冒頭に引用されているエピグラフがラファディオ・ハーンのエッセー「日本人の微笑」に英文で収録されている鳥尾小弥太の文章であることをつきとめた丹治恆次郎(関西学院大学)氏の論文や、筆者(川)が二年前のモンペリエ大学で発表した論文「ヴァレリーと盛成教授」に依拠しつつ、ヴァレリーの青年期の問題作「鴨緑江」を再び論じたものである。「微笑」と「欲望」がエッセーの二つの鍵語であるとし、その二つ

の概念をハーンと鳥尾に負いつつ、青年期のヴァレリー特有の求心的な読み込みと帰納的方法によって造形したのが「鴨緑江」であると主張する。その上で、イエシュアの分析はデカルトの『方法序説』などを引用しつつ、「鴨緑江」の主人公(プロローグとエピローグにだけ登場し、中間部の中国人の長大な独白を無言で聞いている不可思議なヨーロッパ人——《中国のテスト氏》)の存在理由に絞られる。それは結局のところ、エピローグの海の波との戯れ、対象のない純粹な思考の運動に身を委ねて飽くことを知らないという、すぐれてヴァレリー的なテーマの頭場——「特別な目的も定められた方向もなく、ただ可能性と総体的な優雅さの感覚が精神に横溢する時」——に帰着する。それはそれで美しい立論であるが、筆者が「鴨緑江」の草稿を検討し、その公表の経緯を吟味し、一九三〇年代における盛成をはじめとするアジア人との接触を考慮して、中間部の中国人の造形に照明をあてた読解とはかなり趣を異にする。双方の読解は対立的というより補完的と考えるべきものであろうが、あくまで西洋の視点から読み解こうとする者と、東洋の視点にこだわって読み解こうとする者との対照が際

立って興味深いところである。

3 丹治恆次郎(関西学院大学)「鳥尾子爵とその時代」

シルヴィオ・イェシュアと親交のある発表者は、イェシュアを側面から援護する意味合いで、鳥尾小弥太とその時代(明治の文明開化期の政治思想状況)を語った。

「鴨緑江」の冒頭にエビグラフとして掲げられている *Civilisation, according to the interpretation of the Occident, serves only to satisfy men of large desires*

という英文が、ラフカディオ・ハーンの「日本人の微笑」の中に引用されている鳥尾子爵の文章であることをつきとめた発表者は、この一文が鳥尾が生きた時代の日本でどんな意味を帯びていたかを明らかにしようとする。鳥尾小弥太は長州出身であり、その経歴は山形有朋に似ているが、途中で政界中枢部から離脱し、「保守中正論」を唱えて文明開化の趨勢を批判した。それが「大いなる欲望 (large desires)」と西欧文明の動因とを一体とみなす反西欧批判となった。だがこれは単なる伝統主義者の「西洋近代」に対する反発ではなく、明治維新の思想の構造に内在する矛盾であった。尊皇攘夷は二つの語か

らなる。尊皇は実現されたが、攘夷は破棄された。端的な一例は福沢諭吉の「瘦我慢の説」の勝海舟批判にも見られる。尊皇を維持しつつ、「脱亜入欧」へ向かうという矛盾は福沢にもあった。鳥尾の一文はこの矛盾を表現したものであり、彼はハーンがいう優れた伝統的思想家ではなく、「近代」の一面を体現する両義性を持った思想家である。ヴァレリーは「鴨緑江」において、その両義性をとらえていたと思われる。

4 シュシ・カオ(カルフォルニア大学、ロスアンゼルス校)「ヴァレリーと東洋幻想」

英・仏・独語に通じた比較文学者のカオの視点はすこし高いところに設定されていて、いわゆるヴァレリー研究家の発表には見られない視野の広さがみられる。その分、大味なところもあるが、新鮮な感じがすることも否めない。クローデル、セガレン、サン・ジョン・ペルスの例を引いて、ヴァレリー自身はアジアに行ったこともなければ、アジアについて格別多くのことを知っていたわけでもなく、多くを語ったわけでもないという。ヴァレリーと違って、クローデル以下の三人はアジア——中

国や日本——を實際に知っていたが、いづれも現実の東洋よりもそれぞれの想像界の《東洋》に魅せられていた。

その意味では、ヴァレリーがエッセーに書いた「東洋」という言葉が精神にその十全の効果を發揮するためには、そこに一度も足を踏み入れたことがないということが必要条件だ」という命題を裏書きしている。そして想像界の《東洋》とは、欲望の《東洋》でもある。果てしない欲望の対象となり得る《東洋》、それは西欧の歴史が育んできた《東洋幻想》である。「鴨緑江」に登場する中国人は、ただ「中国人」とだけ言われているが、それによって喚起されるイメージは一八世紀のルソーやモンテスキューにさかのぼる中国人像に結びつく。ヴァレリー自身、そうした西欧が長年にわたって作りだした表象としての中国、中国人——「叡知」、「持続」、「永遠」、「瞑想」、「祖先」、「不動」、「虚無」、「歴史」などによって特徴づけられる——については熟知し、かつ意識的であったはずだ。それはさかのぼれば中国の表意文字を世界語の最適モデルと考えたライブニッツに始まり、ゲーテ、ヘルダー、シュレーゲル、ヘーゲル、フェノローサ、パウンドなどにいたる西洋の哲学、美学、文学によって

培われてきたものである。

5 恒川邦夫（一橋大学）「ヴァレリーと西欧の没落

——知性と叡知」

「精神の危機」という有名な評論によって、ヴァレリーは第一次世界大戦後の西欧の没落を、危機感をもって分析したが、ヴァレリーの言葉ははからずも非西欧世界（新世界アメリカと東洋）に対する彼の認識の《危うさ》を露呈している。今日でいうところの《技術移転》に対する西欧の無防備さと無策を批判しつつ、このままいけば、近い将来に《知》の平準化がおこり、質より量が決定的な力を持つ時代が到来するであろう。そうなれば、西欧は否応なく、巨大なユーラシア大陸の西端に位置する一つの岬にすぎない存在になってしまう。予測はさまざまな意味で的中した感があるが、ヴァレリーの立論の根底には西欧中心主義の時代の影が色濃く落ちている。しかし「鴨緑江」の中国人の独白に書き込まれた西欧批判はそれとは別の深い射程を持っているように思われる。西欧が固執する知性に対して、知性がつきぬけたところに存する叡知——いかなるものにも動かされず、自己の

感情や情念を完全に統御する力——を対置する中国人の口から発せられる言葉は、時に禅の公案にも似た凝縮した響きを帯びる。いったいヴァレリーのどこからそうした言葉が出てくるのか。知性を唯一の偶像としたヴァレリーの内面に、知性の働きの限界を深く感得し、その極枯から解放されたいという切実な願いがあったのか。ヴァレリーが好んで使った「精神」「知性」という言葉も一度根本的に西欧思想史とフランス語の分脈で吟味する必要があるのではないか。ヴァレリーの中に感得される《東洋》は、クロードルやマルローの場合と違って、彼自身の人生の体験や生きた知識に基づくものではないだけ、徹底した西欧批判の背後に陰画のようにあぶりだされ、ほの見えてくる何かである。そうした陰画をあぶり出す作業には、《東洋》の目、《東洋》の感性が有効ではないだろうか。

第二セッション ヴアレリーと東洋II

司会 松田浩則(神戸大学)

ミシエル・ジャルティ(アミアン大学)

1 ポール・ギフォード(セント・アンドリュース大学)「東洋の鏡に照らして——ヴァレリーとマルローと《西欧の誘惑》」

ギフォードは、有限世界のなかで、西洋と東洋とが継続的に有意義な文化の創造を行っていくためには何が必要となるかを論じている。先ず、ギフォードは、有限世界とは、これまで世界の頭脳と自負し、政治、経済、文化のあらゆる面で圧倒的な優位を保持してきた西洋を襲った危機であると同時に、その西洋のファウスト的な欲望の刻印を受けた東洋の陥りつつある危機でもあるとしたりうえで、このような危機の認識は、ヴァレリーとマルローという共に「別の鏡」たる東洋の観察者が共有していた認識であるという。そして、ギフォードは、「いかなるヨーロッパが死滅し、いかなる文化上の根が生き続けているか」と自問したあとで、ローマ・キリスト教的な根と、ギリシャ・プロメテウスの根とは危機に瀕しているが、それにもかかわらず西洋文明が全面的な死をむかえているわけではなく、有限世界はなんら西洋にとって悲観的なものではないと結論づける。ただし、そのためには、西洋が世界の文明の中心として安住してしま

うのではなく、「我等が魂の東洋」に自らを映し、真の意味で自らを他者に向かって開いていく努力を通して、自己認識をさらに一層高めていかなければならないと主張する。ギフォードの発表は、ヴァレリーとマルローの文献の精密な読みに基づきつつ、西洋と東洋との新たな関係構築の可能性を示して大変興味深かった。

2 ロバート・ピッケリング(クレルモン＝フェラン大学)「《有限世界の時代が始まる》——思考の政治学をめぐる東洋と西洋の賭」

ピッケリングは、青年時から東洋と西洋の思考方法や感受性の違いに注意を払い続けてきたヴァレリーが、生産手段や開発手段の世界的な平均化に伴い、西洋の優位は揺らぎ、西洋にはもはや暗い未来が残されているのみであるという危機感を抱いていたとしたうえで、ヴァレリーが東洋と西洋との真の対話に基づいた知的協力の必要性を痛感していたと考える。ピッケリングは、マルローの「人間の条件」に登場するカマのなかに、明晰さと純粹さを徹底的に追い求めた結果として文明の破壊にまで行き着きかねない西洋的な思考方法を修正する「精

神の東洋」があると指摘しつつ、純粹さ一辺倒に思われがちなヴァレリーにも、特に、現代世界を考察する時には、「不純さ」を許容する態度が優勢であったと論じている。内的矛盾をかかえ、対立しあうものが共存している世界では、なによりも寛容と自由とが重んじられねばならないというわけである。ピッケリングは中国人とヨーロッパ人との対話からなる「鴨緑江」のなかに、運動と変動を示唆する表現が多いこと、停止していると同時に未完でもあるような時間表現が見られることなどを考慮しつつ、この作品が不動性と変動性、連続と非連続との間の対話、つまり、絶えざる生成状態にある東洋—西洋という界面の諸々の可能性を指向した対話のモデルケースではないかと論じている。さらに、ピッケリングは、西洋と東洋との協力は、相互に補完しあう頭脳の両半球のようではなければならないと主張する。差異化し、しかも、相互に協力しあう両半球は、共に互いにとって不可欠の頭脳であり、そこでは、従来の西洋が世界全体の頭脳で、他の地域がそれを下から支える卑しい身体であるという考えも改められるとする。

3 ウィリアム・マルクス(バリ・ソルボンヌ大学、フランス国立図書館)「ヴァレリーと仏教——知的系譜論の試み」

マルクスは、これまでほとんど研究対象として取り上げられることのなかったヴァレリーと仏教思想との関わりに照明を当てている。ヴァレリーは、一九二九年のあのパーティの席上、ギメー美術館館長のルネ・グルーセから、日本の仏教学者で大谷大学教授の山口益がヴァレリーのことを純粋な仏教徒だと言っていると伝えられ驚く。これは、山口、および、『仏陀にならう』、『東洋哲学史』等の著作のあるグルーセたちの単なる誤解なのだろうか。マルクスは、ヴァレリーの作品のなかで、特に、一九二六年にまとめられた「テスト氏作品群」を手掛かりに、二人の学者がいかにヴァレリーのなかに仏教徒的な側面を読み取っていったかを推理していく。マルクスによれば、仏教を「神や教条や信仰のない宗教」とその著作の一つで書いているグルーセが、「神なき神秘家」テスト氏を仏教徒に近づけたのは大いに考えられることだし、また、テスト氏入眠前の身体的ないし心理的訓練が、仏教のある一派の発展させた瞑想技術を想起し

た可能性も否定できないとしている。そして、ヴァレリーが、『我が母』の著者盛成と一九二七年から一九二九年に頻繁に会っていたこと、また、青年時代に書き始められていた「鴨緑江」が一九二八年に出版された点を考慮しつつ、一九二〇—三〇年代は、ヴァレリーが意識するしないにかかわらず、その生涯のなかで最も仏教に接近した時代だったと論じている。さらに、ヴァレリーが、ニーチェやショーペンハウエルやエルンスト・マッハといった東洋思想に深く染まったドイツ哲学者の読書を通して、キリスト教に本来的な神や死後の生を否定し、非人称的な世界や自我の無化を特徴とする仏教に魅力を感じていたであろうと推測している。

4 松田浩則(神戸大学)「ヴァレリーあるいは《文化のコメディアン》の肖像」

「第三共和制のボッシュエ」と自ら称したヴァレリーの国際連盟やニス地中海中央研究所などでの活躍に注目しつつ、精神連盟の必要性を説く彼のなかに一種のコメディアンを見、その演技のあり方を検討した。そのコメディアンは、ヴァレリーがゲーテやニーチェ、さらには

スタンダールにたいして適用した表現にならって「文化のコメディアン」と呼ばれる。ヴァレリーは、青年時から現代世界に並々ならぬ関心を抱いていたが、一九二二年、勤務先のアヴァス通信社のパトロンであるエドゥアール・ルベィ氏の死去により失職したのがきっかけで、精神の価値、知性の危機をより広い大衆にむかって訴え始める。このようなヴァレリーのなかには、高度な演技性を見て取ることができる。すなわち、ヴァレリーが、単に論旨の展開、発声方法、壇上での身振りを「カイエ」のなかで周到に研究していただけでなく、「だれもが黙示録を書くことができるほど」全面的な危機が世界中を覆い尽くそうとしていた時期にあって、フランス語が可能とするあらゆる伝統的なレトリックを駆使しつつ、あたかも精神がまだ有効に機能するかのように、そして、未来も後世も十分頼るに足るかのよう語り続けたのである。これは、ヴァレリーが危機の深刻さを知らない樂觀主義者なのではなく、事情をすべて承知の上でうったドンキホーテ的な大芝居、テスト氏のモットーのひとつ「信じずに成す」の見事な表現である。第二次世界大戦の開始とともにこのような舞台から下りたヴァレリーは、

現代世界にあまりにも「奉仕し過ぎた」身を省みつつ、「役に立たず、反々現実的で、非々人間的なこと」に没頭することこそ正気を保つ手段としたが、そこには長期的な精神の政策を夢想し続ける「悪しき思考＝邪念」を見て取ることができる。

5 ミシユル・ジャルティ(アミアン大学)「東洋を考へる？」

ジャルティは、ヴァレリーには東洋にかんする厳密な論証的思索はないとしたうえで、ヴァレリーにおいて東洋がいかなる位置を占めていたかを明らかにしようとしている。ジャルティは、ヴァレリーが東洋を他者性と侵犯の特権的な場と考えているが、これは何らヴァレリー独自のものではなく、西洋ですでに二、三世紀も前から続いている伝統にしたがったものにはかならないという。そして、ヴァレリーの東洋理解の特徴は、現実の地政学上の東洋と未だ不確かな神話的空間としての東洋とが、一部同時に、一部継起的に存在している点にあるとする。「東洋」に不可避的にまといつくエグゾチズムを払いのけるために「東方」の語を用いるほどの周到さを見せた

クローデルとは違って、ヴァレリーは「精神の東洋」が維持されるために、現実の東洋にたいする無知をよしとしつつ、東洋を断固として未定のままにとどめおこうとする。「鴨緑江」のなかでは、中国人がそのほとんどの部分で会話の主導権を握り、ヨーロッパ人はその説を拝聴するだけの思考停止の状態に陥っているし、作品冒頭に引用された鳥尾小弥太男爵が指摘している西洋流の「大きな欲望」も痛烈に批判されてはいるが、あくまでもヴァレリーは、東洋と西洋とを対立しあう力関係の中心でとらえていて、東洋と西洋の二つの知から豊饒な混合物を作り上げようなどとは考えていない。有名な一節「西洋は実際にそうであるところのもの、つまり、ユーラシア大陸の小さなひとつの岬になってしまふのだからか」はそのような意識の現れとして読まなければならない。そして、有限世界の開始とともに、このような存在と非在、現実のものとの想像のものとの間で揺れ動いた東洋も終わりを告げるに違いない、とジャルティは最後に付け加えている。

若手研究者のための／によるラウンドテーブル《ヴァレ

リー研究の未来

司会 ロバート・ピッケリング (クレルモンソフエラン大学)

1 今井勉 (東京大学大学院) 「二十五年の冷却期間の後で」

一九一九年、『註と余談』を付して『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』を再版した際、ヴァレリーは一八九五年の初版テクストにかなり手を加えている。手直しには外的要請によるものと内的要請によるものがある。前者の典型は「連続性」という単語の一部削除と力学的モデル構築の天才トムソンに対する称賛の一部削除である。これは初版と再版の間の二十五年間における物理科学的世界観の変化(連続性から不連続性へ、力学的モデル構築の可能性からその不可能性への変化)に対応した手直しだ。一方、内的要請による改変の典型として『序説』第七段落の《*a plus humble*》を《*a plus haute*》に改めた事実がある。『序説』の根幹には、凡人もまたレオナルド的天才の「萌芽」を持った「一種の同類」なのだとする大胆な認識がある。「最も取るに足

りない知性」の持ち主でも「レオナルドの秘密」は所有しているのだとする初版の記述はこの認識を明示していた。しかし、「二十五年の冷却期間の後で」ヴァレリーは、「最も高度な知性」という表現に改めてしまふ。「毎日がほかの日々を嫉妬し、また嫉妬することが毎日の義務である。思考は自分がかつて今よりもっと強力だったということをも、必死になって否定する。現在の瞬間の光は、自分よりも明るい瞬間を過去に照らし出すことを欲しない。』『註と余談』のこの言葉は、「若書き」の大胆かつ楽天的な認識に対する成熟者の含羞を示すと同時に、一八九五年の『序説』の頃がまぎれもなく「明るい瞬間」だったことを認めざるを得ない一種の「嫉妬」をも示す両面価値的な言葉だ。《*la plus humble*》から《*la plus haute*》への改変の背後には、このような含羞と嫉妬があったのではないか。

2 折橋浩司(早稲田大学大学院)「ヴァレリーの「システム」の生成と構造」

ヴァレリーの心理学の基礎概念である「自己変動性」は十九世紀末の心理学理論と密接に関わっている。「自

己変動性」は当時支配的な心理学理論だった観念連合論を、意識状態の自己変動という新たな視点から批判的に捉え直した概念である。観念連合論が、精神という空虚な器の中で遠隔作用を及ぼす神秘的な力によって導かれるような観念同士の非連続的連合過程を考えるのに対して、ヴァレリーは、エーテル状のものに満たされた精神の中で漸次的に推移するような意識状態の連続的継起過程(所与の意識状態自身の変動)を考える。この「心理学におけるファラデー主義」には勿論、電磁場理論の影響が如実だが、「自己変動性」の概念はあくまでも連合論に対する批判的概念として提出されている点に注意すべきだ。事実、ヴァレリーは「操作の理論」において、相継ぐ意識状態間に共通要素が含まれる「理性的関係」を与える変換操作と、「非理性的関係」ないし「象徴的關係」と命名される並列関係のみを与える置換操作との二種の操作を考えているが、そもそもこの考察の土台は連合論の根本原理すなわち「類似性による連合」と「隣接性による連合」の二法則に他ならない。「既知の事柄に対して簡潔で最大限に有力な表象を与えること」を探究目的としたヴァレリーは、アリストテレス以来の伝統

を持つ連合論を、意識状態の自己変動という観点から捉え直し、自らの考察に数学的表象を与えることによって厳密な心理学体系を構築しようとしていたのである。ヴァレリーの思索は時代の知的状況と不可分である。『カイエ』の余白に書き込まれているにちがいない同時代との対話を読み解くことによって、「知的ロビンソン」なる神話は解体されるはずである。

3 田上竜也(東京大学大学院)「システム」と想像可能性

ヴァレリーが「認識の真の理論の冒頭の一章を成す」と位置づけた「想像可能性」の問題は「システム」の企図との関係においていかなる意味を持つのか。想像力は持続と延長の両面で制約されるという問題は初期『カイエ』の「イメージの幾何学」の探究と軌を一にする。ヴァレリーにとって想像力とは記憶に依存する能力であり、それほど奇妙な想像も、それを正確化するにつれ、身体感覚に基礎づけられた具体的経験の記憶に近づく。こうした想像力の制約に抗し、その限界を拡張することがヴァレリーの精神の訓練のライトモチーフになる。また、

『カイエ』に頻出する問題として、想像可能性と概念作用可能性との関係の問題がある。ヴァレリーは、抽象的な論理認識である概念作用の領域を、イメージによる直観認識によって定義することで、抽象、言語機能の本質を明らかにしようと試みる。この、想像可能性と抽象との関係は、「システム」の根幹を成す物理学モデル使用の問題と結びつく。ピエール・デュエムが『力学の発展』で提示した物理学の二つの方向性、つまり定量的方法を旨とする「抽象的」方法(ヘルムホルツ)と幾何学的形象化に依拠する「想像的」方法(ファラデー、マクスウェル)との対立をおそらくは念頭に置きつつ、想像可能性の問題の提起者をヘルムホルツに見出すヴァレリーは、「システム」における想像的方法の限界と「システム」自体の限界に意識的になったと考えられる。なぜなら「システム」が袋小路に陥ったひとつの理由に、物理学における力学的ヴィジョンの終焉があるからである。原子物理学や統計物理学の進展によって、物理学は、想像可能性から解放されると同時に「システム」による心理学への直接的導入をも排除する地点へと到達したのである。

4 森本淳生(京都大学人文科学研究所)「エレアのゼノンをめぐる——『有限主義』の系譜とヴァレリー」

ヴァレリーの探求が精神の力の真の限界を探り当てる試みであったこと、また『海辺の墓地』に顕著なようにエレアのゼノンの名が彼にとって親しいものであったこと、この二つは初期カイエの断章「ゼノンへの返答」や『アガート』草稿の中で一点に結びついて現れている。

この結びつきは、ヴァレリーの独創ではなく、十九世紀末の『形而上学道德評論』において展開された「有限主義者」と「無限主義者」との論争の影響によるだろう。

争点は、「無限分割は可能か?」「延長、時間、運動は連続か不連続か?」といったものであった。主な有限主義者としては、フランソワ・エヴェラン、ジュールジュ・ルシャラがあげられる。二人の無限批判は、フランス新カント派の祖シャルル・ルヌヴィエの「数の原理」に基づく。ルヌヴィエの名はジード宛書簡の中でヴァレリーの賞賛する著者のリストに入っている。他方、無限主義者としては、ベルクソン、クチュラ、ノエル、ミローなど

があげられる。ノエルとミローが論文を出せば、すぐにエヴェランとルシャラが反論を出すという具合に、非常に活発な議論が行われた。確かにヴァレリーの無限批判は「ひとたびある行為ができるようになる」と、この行為の無限の反復を精神が考えられるようになる」というポアンカレの議論に直接的な影響を受けているが、このポアンカレの議論自体、同時代の無限論争の文脈の中で行われていた点に注意したい。また、ヴァレリーのパスカル批判は有名だが、パスカルは有限主義者の批判対象であり、エヴェランはヴァレリー同様、パスカルの詩的な性格を批判している。このように『形而上学道德評論』を中心に展開された無限をめぐる議論は、「有限主義者」ヴァレリーの思想形成に直接・間接の影響を与えているのである。

5 林直子(大阪大学大学院)「聞いた声と書かれた声」
声は「私」を二つに分裂する。聞かれた声は話す私と聞く私に、書かれた声は書く私と読む私に。聞かれた声は聞かれると同時に消えていくが、書かれた声は紙の上に残り続けるため、書く私と読む私に時間的ズレを

生む。四つの場合を考えよう。「私が私を聞く」場合、話す私と聞く私は時間的に一致し、聞かれた声は「今、ここ」で話す私から切り離されない。これを「生きた形」とする。これに対して、読む私の存在がなくなると紙の上に存在し続ける書かれた声を「死んだ形」とする。

「私が書く私を見る」場合、「今、ここ」で書く私は紙の上に自分の声を写している。聞かれた声を書かれた声へと移行する。「生きた形」が「死んだ形」へ移行する。「私が書かれた私を見る」場合、「かつて」書いたものを「今、ここ」で読むことで「死んだ形」が「生きた形」に結びつく。だが、ファウストが嘆くように、自分の書いたものを賞賛すれば「今、ここ」で読む私が「かつて」それを書いた私より劣った存在になり、書いたものを嫌悪すればその逆になる。いずれにせよ、どちらかの私がおとしめられる。このジレンマから抜け出すため、ファウストは二度と書くことも読むこともしなくなる。「私が書かれた私を聞く」場合。これがファウストの苦肉の策だ。「死んだ形」であるはずの書かれた声は、リュストが「今、ここ」でそれを読むことによって現在に戻ってくる。人生を「一回り」したファウストの「二回

り」めの人生では、「かつて」の私と「今、ここ」で生きている私が調和し、「私」は現在そのものとなっている。ファウストはリュストの声を聞きながら永遠の現在を生き続けるのだ。

6 山本伸一(東京外国語大学大学院)「『アガート』をめぐるいくつかの問題」

『アガート』が提示する極めて広範な問題のうち、「ジャンル」と「文学性」の問題を取り上げたい。『アガート』のジャンル決定は困難だが、純粹に理論的な表現でも純粹に文学的なテクストでもないとするれば、その理論面のみが強調され、一種の哲学的研究のためにテクストが従属させられる事態は公平さを欠く。哲学的あるいは文学外的な側面を排除するというのではない。テクストをその全体性のうちに捉え直すために、文学的側面の再強調が必要なのだ。文学的観点からの『アガート』の再評価を可能にするためには、あらためてその「文学性」の検討が必要となろう。『アガート』に「文学性」があるとするれば、それは「物語性」と「詩性」の二つである。「物語性」は何らかの筋立ての存在を前提とする。『アガ

「ト」は抽象的な外観をしているが、それ自体の「語り」の論理」に立脚したかなり明白な筋立てが認められる。話者は常に何かを探索し、見つめ、感覚し、問いかけ、描写する。こうした「語り」の行為項的分析の可能性がある。各ディスカールの「述部」の意味論的分析から遡及的に行為項を特定する作業を全体的に行えば、主体の欲求対象が名詞句の第一次の意味作用とは別の次元で明らかになる可能性がある。一方、「詩性」の抽出については、語用論・音韻論・文体論的分析の可能性がある。書き手による使用語彙の選択傾向を他の詩的テクストとの比較によって統計的に析出する語用論的分析によって語彙の詩的性格が、音韻論的分析によってテクストの散文的外観の下に潜む韻文の痕跡が、文体論的分析によって芸術的側面が明らかになるだろう。「アガート」の「文学性」再評価のためには、以上のような方法論的可能性が残されている。

第三セッション ヴァレリーと両大戦間

司会 石田靖夫(千葉大学)

ジャン＝マルク・ウベール(トゥール大学)

1 モニク・アラン＝カストリーヨ(パリITEM)
「ポール・ヴァレリーの二運河間——スエズとパナマ」
一九世紀後半の最も重要な政治的出来事としてスエズ運河の開通のことを語ったヴァレリーはまた、マラルメの「賽子の一投」の機縁にもなった経緯もあって、パナマ運河の着工を祝ってもいた。「東洋に誘惑されること以上にヨーロッパ的なのはない」とすれば、彼は、クローデルとの対話のなかで日本に対する愛着の念を表明しているところからもその一端がうかがわれるように、東洋に誘惑されながらも、ヨーロッパ精神によってもたらされた文化的貢献を確認しそれを継承するという思考の枠内にあくまでもとどまりつづけた。ヴァレリーよりもほぼ一代前に、「ヨーロッパにとつての、アジア化の危険」を指摘したエリゼ・ルクリュエ程ではないにしても、優劣のレヴェルでの西洋と東洋の対立図式が、温存されていたのである。しかし、そのようなヴァレリーの立場を越えて、両運河の歴史の意味は、西洋と東洋の力学的関係において一五世紀以来維持されてきた前者の優位性が破綻をきたす契機になったことにある。現代の世

界情勢からすれば、一方で欧米の停滞を、他方でアジアの目覚め(歴史への回帰)を認めざるをえないからである。

2 山田広昭(東京大学)「政治的無意識——危機に瀕した一つのヨーロッパ意識の分析」

ヴァレリーの詩編「消えた葡萄酒」、彼の二つの試論「精神の危機」と「方法的制覇」、ゴビノーの「人種の不平等に関する試論」、これらのテクストを相互に媒介させながら、ヴァレリーにおけるヨーロッパ意識を読みとく。まず、文明の死というテーマをめぐってゴビノーが「血の混交」をあらゆる文明の死の原理とみなしたのに対して、ヴァレリーは、前者の人種差別的な意味を払拭して「拡散」のなかにヨーロッパ文明への希望を見る。しかし、そのような違いにもかかわらず、二人に共通するのは、デカダンスの自覚であり、優者だけが生き延びるといふ当時の通念に反して混交もしくは拡散の結果としての「凡庸さの勝利」を認識したことであった。次にヴァレリーは、他者の問題に無縁ではなかったが、それは、あくまでも自己内部での次元に限られていた。した

がって、たとえば、日本のことを複数形で語ったヴァレリーにとって、固有名としての日本ではなく、ヨーロッパ精神の「投影」としての他国こそ重要であったように、他者との対話は「自己と自己」の間でしか成立しなかったのである。

3 バスカル・メルシエ(九州大学)「《東部戦線、異常なし?》——ポール・ヴァレリーとヨーロッパ・アジアの対話——パリ、ポンティニー、一九二五年」

一九二五年、ヴァレリーは、雑誌『カイエ・デュ・モワ』のアンケートに答え、ポンティニーでの討論会に出席する。両者のテーマは共に、東洋と西洋の関係をめぐるものであった。同討論会での発言内容を筆写した未発表資料を参照すればなお一層わかるように、ヴァレリーは、西洋に対する東洋の貢献の可能性について、全否定ではないにしても否定的な立場をとる。彼にとっても、西洋の科学的合理主義と東洋の信条とは両立できないものであったからである。ポンティニーにおいて、彼がいかなる形而上学をも拒否し、あくまでも科学的精神の価値を称揚したのも、当然であった。同じ頃の『カイエ』

で、ヴァレリーは、「正義、輪廻、再受肉、受肉、魂、審判といったあらゆる馬鹿げたことが東洋からわれわれのところに来て来たというのは、ありえないことではない。すなわち、同じ者は他なる者なのだ」とまで言っている。このようなヴァレリーの姿勢を必要以上に強調することは避けねばならないが、彼が東洋から期待しているものは何もないとみなしたことは事実なのである。

4 ハルトムート・ケーラー(フライブルク大学)「ヴァレリーと人間意識の探求——今日から見た一九三〇年代」

意識の成立条件とは何かという問いをたてたヴァレリーは、レールミットが指摘したように、確かにその一方で意識をめぐっての実験科学の重要性をはっきりとは認識していなかった。意識に対する飽くことをしらない彼の問題設定からは、組織学、進化論、生物学的解明の社会的貢献度という二つの論点がすっぽり抜けおちていたのである。しかし、彼には、意識を一つの機械になぞらえる側面もあったことは否定できない。それは、「精妙な力学と電磁気学」を組み合わせた特殊な機械を発明

することによって人間の「神経—心理—物理学的生体組織」を解明し、そのような解明によって、さらに改良されたその種の機械を発明することに通じるとみなした彼の予言的な断章にうかがえる。近年のめざましい脳の研究成果のなかで、そのような彼にとっても無関心ではないられなかったにちがいないようなものを挙げるなら、それはダマシオとエデルマンの二つの研究である。前者は、人間における「神経学的、心理学的かつ論理的レヴェルを総合する」情動理論を唱え、後者は、「精神の神経科学的モデルを打ちたてる」試みであった。

5 石田靖夫(千葉大学)「政治の批判あるいは批判の政治」

『農事詩』をめぐる変奏曲」においてヴァレリーは、みずから書き得たであろうテクストの題名を示唆している。それは、彼が詩学講義のなかで提案した文学理論の構想からしても必然的なテーマであるだけでなく、現代の文学批評において最も根本的な問題の一つである媒介の問題でもあるのだが、展開されることがなかった。その代わりに、婉曲語法を通して彼はアカデミー・フラン

セーズ会員として国家から庇護されているみずからの立場を自己弁明し、貴族的志向をほめめかす。そのような志向にもかかわらず政治的立場としてあくまでも中立性を装うことそのものが持っている非中立性と退行性を暴露しているのが、彼のエッセー「自由を論じ潮汐に倣う」であった。そこで論じられている彼の自由観は、その貴族的意識に培われ、彼の言う「純粹自我」に潜在的に基礎づけられているまさにそのことによって、閉じた思考でしかない。一方で彼の二重の生産様式である注文生産と『カイエ』の執筆、他方でその中間形式である詩学講義、これらの分業は、ヴァレリーの貴族的志向性を通してこそ可能であった。これは、仮説であり、かつまた、「ロートレアモンの格言はテスト氏にまでとどかなかった」と言ったベンヤミンへの応答でもある。

6 ジャック・ラヴォ(パリーTEM)「地中海大学センター、文化の使命そして政治行動」

文学に惹かれていた政治家ド・モンズイー(文部大臣)と、政治に惹かれていた文学者ヴァレリーとの間の、互いに分かちもたれた魅惑と反発の関係を、地中海大学

センターの創設とその活動を通して考察する。同センター設立の背景として、二つのことが指摘できる。まず、ド・モンズイーは一九三〇年からすでに、イタリア、フランス、スペインからなる「ラテン・ヨーロッパ合衆国」を構想していた。次に、ニース市長は、ムッソリーニ政権の資金援助のもとでサン・レモンで開かれていた講演やシンポジウムに対抗して、同市に大学関係の機関をつくることを提案した。ド・モンズイーは、結局ヴァレリーを所長に任命することになる。後者のヨーロッパでの名声と、ムッソリーニとの個人的なつき合いを利用したわけである。それは、ド・モンズイーが、同センターを通して、ファシズムにフランス文化を対置し、地中海におけるイタリアの影響力を相殺することだけでなく、ムッソリーニとのみずからの個人的関係を利用してイタリアとドイツの同盟を阻止することをも意図していたからであった。この目論見は、失敗する。イタリアが、一九四〇年にドイツに敗れたフランスを背後から攻めよせたからである。ヴァレリーの地中海大学センター所長就任と、その活動は、以上のような政治的コンテキストのなかに置かれていたのである。

7 ジャン・マルク・ウベール（トゥール大学）「ヴァレリーと国際文化協力」

一九三六年にブダペストで行われた知的協力委員会の議長を務めたヴァレリーは、人間性と人間主義を定義するといふ二つの議題に対して、悲観的にならざるを得なかった。彼にとつて、たとえば、人間主義という言葉は定義し得ないものの一つであり、それは、この言葉が「身体についての思考」身体による思考である感覚の問題であつたからだけではなく、集団でそのような言葉を定義することへの不信があつたからでもある。そのように悲観的であつたヴァレリーは、「赤色の手帳」——後に三男のフランソワ・ヴァレリーの手によつて『純粹および応用アナキー原理』として出版されるもの——を持參して、討論から触発されて導き出されたアンチテーゼと思われる「アナキー」という概念についての考察を書き記している。彼にとつてのアナキーとは、「現実的なもの（あるがままのもの）」と「現実性（知性の固着）」の區別を意味した。そこから、当時の政治を「現実性」に依拠したものと批判し、「現実的な

もの」に基づいた政治を対置させる。後者の政治は、前人未踏なものへの志向として、詩も人間も本質的に「冒険」であるとするヴァレリーの内的要請から生まれたものである。

第四セッション 神話学、美学

司会 中村俊直（お茶の水女子大学）

ブライアン・スティンブソン（ローハンプトン・インスティテュート）

（本セッションでは、当初の予定では、八つの研究発表が予定されていたが、残念ながら、フランソワーズ・アフネール氏（ベルピニャン大学）が突然の病氣のために来日を取りやめたので、結局行われた発表は七つであつた。

このセッションでは、特に、ヴァレリーの「神話」に対する関心や、彼の建築、絵画、演劇などについての芸術論、そして彼の創造意識における神話学と美学との関係が、分析と考察の対象として取り上げられた。）

1 カルル・アルフレッド・ブリュアー(キール大学)

「ヴァレリーと精神の神話学——神話への記号論的・文化横断的アプローチ」

ブリュアー氏は、「神話」の概念はヴァレリーの宇宙においては重要な概念であるにもかかわらず、これまで十分な分析がなされてきたとは言い難いと言う。そして、ヴァレリーは、神話の言語的な特性を強調することによって独自の「精神の神話学」を抱くようになったと主張する。

氏によれば、ヴァレリーは、フロイト的な、あるいはユング的な精神的な神話の解釈とは一線を画することを目指していた。即ち、ヴァレリーによれば、神話を作るのはフロイト的な「無意識」ではなく、「内的言語」、あるいはより正確に言えば、「言語的錯綜体」だということになる。ヴァレリーは、無意識の象徴体系に基づく精神的な解釈でもなく、民俗学的でも哲学的でも社会学的でもなく、神話への記号論的アプローチの道を選んだ。それはヴァレリーの全くオリジナルな視点であった。

最後に、氏は、このような「精神の神話学」の記号論

的な把握によって、様々な文化における神話を、横断的・包括的に考察することができるのではないかと述べる。

2 加藤邦男(京都大学)「建築家の行為をめぐる、ヴァレリーの錯綜体とプラトンのコウラ」

加藤氏は、ヴァレリーにとっての創造行為一般の本質的な意味を、自身が建築家である立場から、独特の論理展開によって明らかにしようと試みた。

加藤氏は、「アルシテクチュール(建築)」の語の語源的意味の考察から始めて、建築家の行為とは、目には見えない「全体」に対する感性を保ちながら、目に見える具体的な構成を遂行することであると定義付ける。それ故、建築するという行為は、あらゆる創造行為のモデルとしてとらえられる。

そして、氏は、特にヴァレリーがその対話形式作品の『固定観念』の中で展開している「錯綜体」の概念に注目する。これは、現実態としての特殊な存在者において、常に潜勢態として存在する一つの「全体」を指し示す概念であり、ヴァレリーはそれに、「生きた全一のもっとも一般的名称」を与えたのだと主張する。そして、建

建築家—芸術家は、宇宙の始原の混沌に挑む創造神デミウルゴスの如く、太初の「始まり」から始める存在だと氏は説く。

更に、氏は、プラトンの宇宙創成論における「コーラ」の概念を考察することによって、プラトンとヴァレリーの二人の論理展開には類似性があることを指摘する。

3 アンヌ・メレス＝ランド (サンフランシスコ大学)

「画家あるいは建築家ヴァレリー」

この発表では、メレス＝ランド氏は、ヴァレリーにおける詩人、画家、建築家の三者の結び付きと、その共通の美学において、特に、色彩が果たす機能について考察を試みた。そのために、氏は、ヴァレリーの作品『地中海の感興』から三つのテキストを取り上げ、ヴァレリーの創造意識において色彩、特に赤色の果たす役割が重要であることを分析した。氏は、同作品から次のような一節を引用して、ヴァレリーの赤色への感受性の鋭さが、日本の浮世絵への関心とも結び付いていることを指摘した。(たとえば、北斎のごとき才能と好奇心を持った者が、「……」どんな素晴らしい浮世絵、何という珊瑚

的なテーマを抽出したことだろう。)

そして、ヴァレリーにとっては、詩人、画家、建築家はそれぞれが、「普遍的な自我」の「特殊な個性」としての現れであることを、やはり同作品を引用しながら主張した。

4 中村俊直 (お茶の水女子大学) 「ヴァレリー——イメージと言葉」

本発表は、ヴァレリーの創造行為における視覚的イメージの機能についての考察である。ヴァレリーがイメージに与えた重要性の位置付けは、まずナルシス神話に対する彼の関心の中に認めることが出来る。即ち、ナルシスは、泉の水に映った自分の姿のイメージによって自己自身の美と同一性を確認する。ここにおいては、オリジナルよりもむしろそのイメージの方が、価値の序列において上位に位置する。この「オリジナル」とその「イメージ」のどちらを重視するかによって、パスカルとヴァレリーの両者の絵画に対する基本的な価値判断が全く対照的になる。パスカルは絵画の空虚さの理由として、まさにそれが「オリジナル」でないことを挙げるが、ヴァ

レリーは逆に、絵画的イメージは、オリジナルの欠如として定義されることにより、このような「欠如」こそが精神の機能活動には必要不可欠であると説く。より一般的に言えば、「欠如」「沈黙」「空虚」といった要素をヴァレリーは積極的に評価して重視するのだが、パスカルは、そのような要素をあくまで否定的なものともみなすのである。

ヴァレリーがデッサンを高く評価するのは言語への不信感の裏返しである。そして、イメージによる表現は、日常言語に支配されている精神によっては把握不可能な対象の細部までも意識させてくれるが故に重要である。

5 ユゲット・ロランティ(ポール・ヴァレリー大学)

「ヴァレリーとクロードルを通して見る東洋の演劇と西洋の演劇」

ヴァレリーの演劇とクロードルの演劇、そして東洋の演劇と西洋の演劇とを比較対照することによって、演劇という芸術ジャンルの普遍的な特性に迫ろうとした試み。駐日フランス大使クロードルが、東洋の演劇、特に日本の「能」から大きな影響を受けたことはよく知られてい

る。クロードルは「能」の持っている宗教的、儀式的性格に特にひかれた。それに対してヴァレリーは、直接的には、日本の「能」については何も知らなかったはずだが、ヴァレリーの二つの「楽劇」、特に『アンフィオン』と、彼の演劇についての理論的考察には、「能」との類似点を認めることができる。氏に主張する。さらに、ヴァレリーと世阿弥の二人の演劇論には似通った点が多く、この点に関して、氏は、「平行する道をたどった二つの知性」だと言う。例えば両者は共に、俳優が演ずる登場人物とは、決して何らかの人間的な個性を表現するのではなく、一般化、抽象化への傾向を有する存在でなければならぬといった共通の主張をしていた。

6 レジーヌ・ピエトラ(グルノーブル大学)「ヴァレ

リーにおける芸術と自然」

ピエトラ氏は、まず、ヨーロッパの美学を長い間支配していた一つの中心的命題の存在を指摘することから始める。それは、「芸術は自然を模倣する」という美学的命題である。この命題の起源は、古代ギリシアのプラトンやアリストテレスの「ミメーシス」の理論に起源を持

ち、十九世紀までのほとんどの主要な芸術家は、多かれ少なかれこの美学に支配されていたと氏は言う。

しかしながら、ヴァレリーはこの命題には与しない。芸術創造と自然との関係の本質は、「能産的自然」と一体化することに存するのであって、「所産的自然」の単なるコピーに存するのではない。その時「自然」はもはやその外面を観照すべき対象としてではなく、一つの生産する力であり、それと一体化してその脈動を再認識するべき力として把握されることになる。それ故、芸術創造は、自然の単なる模倣ではなく、一つの生産力としての自然と一体化することにあるという東洋的美学は、ヴァレリーと共通するという論旨が展開された。

7 プライアン・ステインブソン（ローハンプトン・インステイテュート）「芸術への眼差しあるいは見る術」
ステインブソン氏は、ヴァレリーの芸術論を分析することにおいて、一つの独自の視点を設定した。即ち、創造の過程の分析でもなく、色彩や構成の問題の考察でもなく、「眼差し」の構造の分析である。この発表においては、まず何よりも、ヴァレリーにおける「眼差し」の力

学と現象学」を明らかにすることが目的であった。

氏によれば、ヴァレリーの美術批評の特徴の一つとして、画家はどのように対象を見るのか、画家の視覚は通常の視覚とはどのように異なっているのかといった、眼差しについての考察が多いと言う。このような指摘から出発して、芸術家の眼差しとその対象との往復運動、眼差しと手と精神との三者の関係、内的言語と眼差しとの相関関係などが分析された。

以上の研究発表の後に、場所を変えて、「音楽の夕べ」が催された。奥村直子嬢によるピアノ独奏で、前半はフォーレ、ドビュッシーの名演奏。後半は、ユゲット・ロランティ氏によってヴァレリーの楽劇『アンフィオン』の詳細な紹介があった後に、この作品に付けられたオネゲル作曲の音楽が演奏された。このような滅多に聞く機会に恵まれない曲を、生の演奏で聞くことが出来、一回大いに満足した。

第五セッション システムの力と無力

司会 塚本昌則（白百合女子大学）

ネッド・バステ(ニース大学)

1 ネッド・バステ(ニース大学)「システム」の《外部》と絶対としての苦痛」

あらゆる現象を機能的な側面から捕捉しようとするヴァレリーの「システム」構築への意志は、その意志を無に帰すような激しい苦痛とつねに対峙している。バステ氏は、この「システム」への意志と苦痛との対立の諸相を分析し、最終的に「苦痛」が知性による絶対的な制御の夢を突き崩す力として働くことを指摘した。

すでに『テスト氏との一夜』において、苦痛という謎は、絶対的な力を得ようとする精神の前に立ちほだかる乗り越えがたい壁として提示されている。「感性」の嵐に対して、知性はただ自らを守ろうとすることしかできない。それは感性という海が凪いだときにつぶやかれる表層的なおしゃべりにすぎないのだ。ここでバステ氏は、ヴァレリーが「システム」構築をとおして目指したものが、「夜のむき出しの経験」に意識をさらす苦痛からの解放、「静謐のエチカ」にあるのではないかという仮説をたてる。それはギリシャ哲学における「アパテイア」、

あるいはキリスト教における復活後の至福を受けた「栄光の身体」等々に通ずる無感覚の探求なのではないか？しかし、つねに「防衛的」であらざるを得ない人間が、形而上学や心理的手法に頼らず、生化学的レベルで感性を自在に操れる「攻撃的」な人間に変化しない限り、自らの力ですべてを律するという知性の夢がかなえられることはないだろう。バステ氏はそのような知性の「敗北」の象徴として、ヴァレリーの最後の『カイエ』が「苦痛ノ徴ノモトニ」と題されていることを改めて強調した。

2 ジャン＝イヴ・デュブラ(西オンタリオ大学)「デカルトからヴァレリーへ——無限を前に覚える不安の二形態」

「無限」に対する態度をとおして、デカルトとヴァレリーを比較し、あくまでも有限性を基礎とするヴァレリーの思考のうちに、無限に関するなんらかの肯定的な視点を見いだそうとする試み。

デュブラ氏の要約によれば、デカルトはあらゆる認識の可能性を無限に基礎づけている。デカルトにとって、

創造主の「完璧さ」と「無限」という観念がなければ、認識はあり得ない。それに対して、ヴァレリーの探求は認識の有限性に基づいている。現実に対応するものを持たない名前だけの問題を拒否し、あくまでも観察可能な事象に思考を限定することがヴァレリーの基本的な態度となっており、それからみれば、「無限」は実質を伴わない単なる言葉の問題にすぎない。デュプラ氏はここで、ヴァレリーが唯一「無限」という言葉を肯定的に使う分野として美学に言及。実際ヴァレリーは、実践的な物事が有限性への傾向を持つのに対し、美的事象は無限に向かう傾向があることを指摘している。ここで言う「無限」とは、「満足が欲求を甦らせ、応答が質問を再び生み出し、現存が不在を、所有が欲望を生じさせる」(「美的無限」)機構を指している。このように、ヴァレリーは認識においては有限を原則とするが、人を認識へと駆り立てる欲望のレベルにおいては無限を認めていた。デュプラ氏は、この欲望における無限と認識における有限性とのコントラストがヴァレリーの思考を特徴づけているという見解を提示した。

3 塚本昌則(白百合女子大学)「ヴァレリーと曖昧事」「理解する」ということは、ヴァレリーにとってはその対象の諸特性を説明することだけではなく、その対象を知的な操作によって再構成する力を獲得することをも意味していた。この態度には、探求の初期には十分に意識されていなかったある矛盾がはらまれている。それは明確さへの意志が分析の対象となる事象の透明さを目指すのに対し、構築への意志の方は知性によって完全に制御できない不透明な部分をむしろ必要とするという点である。

ヴァレリーはこの矛盾を、とりわけ一九一〇年代以降のテクストで繰り返し取りあげ、作るという行為が明確にしきれない「曖昧な」部分を完全には排除できないことを強調するようになる。あらゆる現象を知性によって統御するという「システム」の夢は、作るという行為においては完全に実現されることはなく、むしろ分節化しきれない生成する力がそこでは決定的な役割を果たしているのだ。ヴァレリーの思考には、自らの力に還元できない「曖昧なもの」の領域を知性の力によって廃絶しようとする方向性がある一方で、このように「曖昧なも

の」のはらむ力とともにものを作りだそうとする方向性もふくまれている。この明確さへの意志と作ることへの意志との対峙は、テキスト産出の大きな力となっているのではないか。またそれは、自らが生みだした方法によって次第に自動化し硬直化してゆく同時代の知性のあり方への批判の基盤に横たわる視点ともなっているのではないだろうか。

4 ジャン・ピエール・ショパン(アミアン大学)「ヴァレリーの黙示録」

ヴァレリーは、技術が人間活動の中心的な位置をしめることによって、空虚な円環運動が繰り返されるだけになる危険性をしばしば強調している。ショパン氏はこの「黙示録」的ヴィジョンから逃れる道をヴァレリーの思考のうちに読みとろうとする。

ショパン氏によれば、ヴァレリーの思考を方向付けているものは、原則なき原則、システムなきシステム、破壊のための構築といったもので、一方的にある構築物に向かうのではなく絶えずそこからの脱却をはかる動きが一体となっている。ヴァレリーの思考を何よりも特徴づ

けているのは、この二つの契機のいずれにも偏らず、絶えずその二つのあいだをダイナミックに行き来する運動である。ショパン氏はこの相反する二つの方向性を象徴的に西洋と東洋に重ね合わせ、西洋的な思考を秩序、規則、方法によって、また東洋的な思考を無秩序、曖昧なもの、原初の混沌によって性格づける。思考がそのいずれかの方向に固定されてしまえば「黙示録」的事態は避けがたいものとなるだろう。「西洋」には手段・技術への信仰のうちに硬直化してしまうという危険性があり、「東洋」には限定しがたいもののうちに解体してしまうという危険性がある。そのいずれにも与せず、二つの極のあいだを絶えず揺れ動くヴァレリーの思考のうちにこそ「黙示録」を逃れる道があるのではないかと、ショパン氏は論じた。

5 アリーナ・レデアヌー(ルーマニア・ポール・ヴァレリー研究センター)「解放のプロセスとしてのヴァレリーの対話篇」

ヴァレリーの「対話篇」を「システム」構築への意志と関係づけようとする試み。

ヴァレリーの「システム」は、絶えず変動する感性の変化、必然的に不確かなものから始まる思考の機能作用を明確に捉えることを目的としている。それは諸々の所与や事実を積み上げることではなく、そのような事実を生み出す機構を見抜く潜在的な力の増大を目指すものだ。このように確定された事実ではなく不安定な過程を重視する態度は、テキストのレベルでは、開かれた、断片的な形式を必要とするだろう。レデアヌー女史はさらに、ヴァレリーにおいて自我がつねに二重のものであることを強調する。ヴァレリーには、個別的な自我と同時に、どのような形を取ることも絶えず否定し続ける自我がある。こうして絶えず揺れ動く思考の過程は、つねに否定の契機をはらんだ二重の自我のあいだの対話によって営まれることになる。このような見地から、レデアヌー女史は、ヴァレリーが思考の現実の働きを映し出す形式を対話において見出したものと論じる。対話形式は、ヴァレリーがはっきり指し示さない時でさえヴァレリーのテキストの特徴をなしている。なぜなら「どのようなモノローグも対話だ」からである。レデアヌー女史は一九〇七年から構想された複数の人物による対話篇において、

この「開かれた対話構造」の可能性がより深く追求されていると指摘する。ヴァレリーの「対話篇」が本質的に未完成の体裁を取るのには、思考の自由を確保するために意図的に選択されたものなのである。

6 ミシェル・フィリップソン（ボルドー第三大学）「ポ

ール・ヴァレリーと昇る太陽の帝国（『日の出づる国』）

フィリップソン氏は、ヴァレリーのテキストに頻出する「夜明け」のテーマを、日の出づる場所である東洋と関連づけながら分析した。

フィリップソン氏は外的な刺激のない「夜」こそ理性の時であり、「昼」は錯乱の時だとする独自の視点から、闇が光に交代する夜明けが、ヴァレリーにとって「危機」的な地点を構成していると主張。完全に夜が明けてしまえば「社会生活」が始まり、「知的生活」は終わりを告げる。フィリップソン氏によれば、ヴァレリーにとっては闇の中にひそむ「虚無」、つまりは外的刺激の完全な不在こそ完璧な理性をつちかうものである。それが「東」から射す日の光によって個別的なさまざまな事象

のうちへと解体されてしまうのだ。その意味で日が昇る「東洋」は創造活動を促す「虚無」が途絶える場所である。しかしながら、詩人としてのヴァレリーは、「東」から次第に姿をあらわす事物の輝きと形の美しさを歌う。この時ヴァレリーは純粹な思念の時を去り、光と色のうちにあらわれる世界の輝きを描く画家ともなる。若きパルクも最後には「生まれることの甘美さ」を歌ってはいないだろうか。この視点から見れば、「東洋」は賛美の対象となる。

フィリップ・ポン氏の発表は、このような論旨によってよりも、にわかには分節化しがたいその「詩的」言語によって聴衆を圧倒したことを付記しておく。

第六セクション 言語、文学、エクリチュール

司会 山田広昭(東京大学)

セルジュ・ブルジャ(ポール・ヴァレリー大学)

1 ユルゲン・シュミット・ラーデフェルト(ロシュト

ック大学)「《鑄型としての言語》——考えること、思

想を翻訳し、それを記号で伝達すること」

「言語、鑄型」ということばで始まるヴァレリー晩年のカイエの一断章を出発点として言語と思考との関係を再考しようとする発表であった。思考を条件づけるものとしての言語という問いはヴァレリーにとってつねに中心的な位置を占めていたと言ってよいが、発表者はそれを三つの観点から考察する。第一は、サビオールフの仮説に代表される言語的相対論(人が何をどのように思考するかは、さらには世界をどのように知覚するかさえ、人が話している言語の構造に依存する)との比較においてであり、第二は、それをより具体的に、話す主体としての「私」の役割、機能から分析することである。

日本語話者の主体と西欧語(たとえばフランス語)話者における主体とは同じではない。なぜなら日本語とフランス語では人称代名詞の体系が大きく異なるからである(日本語にはフランス語の意味での人称代名詞が存在しない)。このことは「誰が思考しているのか」という問いに影響を与えずにはいない。「私が話す」「私が考える」というときの「私」とは何のことなのか。これはヴァレリーの考察の変わることのない主題である。第三は、ヴァレリーの探求をニーチェのそれに結びつけることで

ある。両者は西歐的主体の相対化という点で共通しており、それこそが日本でこのふたりの思想家に向けられている関心の高さを説明するのではないかと、と発表者は言う。

ただ、シュミット＝ラーデフェルトはこれまでさまざまな側面からヴァレリーの思索の言語論的、言語学的射程を論じてきたが、その彼をもつても今回の発表は上記の問題についての通りいっぺんの解釈を越えているとはいいがたい。短時間の口頭発表という制約はもちろんであるが、言語的相対論のもつ循環論的な構造、さらには安易な一般化への誘惑を断つことは相当に困難である。

2 ジャクリヌ・クリエ (PARIETEM) 「靈感と詩作のはざまのポエジー」

詩こそヴァレリーの第一の問いであったという主張から始めて、クリエは、詩ははたして靈感に属するのか、それとも詩人の意識的な構築作業 (travail) に属するのかという、ある意味ではきわめて古い問いに対するヴァレリーの姿勢、回答をとりあげて、あらたな解釈を施

そうとする。ヴァレリーは靈感の存在、詩人の意識の外部からやってきて詩の源泉となるものの存在それ自身を否定したことはない。ただ彼はこの外部的で無意識的な要素をあくまでも詩人 (創作主体) の意識のコントロール下におくことを要求するのである。クリエは、靈感の現実性に対するヴァレリーの両義的な態度をこのように確認した上で、「若きバルク」の冒頭部分の草稿を音楽的、音調論的に詳細に分析することから得た仮説の一部を提示する。彼女によれば、この詩の冒頭部にはポール・ヴァレリーの名が文字どおりアナグラムの書き込まれている可能性がある。この「事実」をはたしてどのように解釈すればよいのか。時間の都合で結論は示されなかったが、ブルジャがあとでコメントしたように、インスピレーションと意識的創作というような問題系は、一般論としてではなく、こうした実際の創作過程の生成論的な研究を通じて論じられるべきであることはたしかである。

3 フロランス・ド・リュシー (フランス国立図書館) 「《アガート》——理論から詩へ、エクリチュールの一

問題」

「アガート」という、その短さにもかかわらず、いやむしろその短さのゆえにヴァレリーの作品のなかでもほとんど別格の難解さをもつ散文詩になんとか統一的な像を与えようとして、ド・リュシーはふたつの視点を提出する。ひとつはこのテクストをヘルムホルツに代表されるポスト・カント的な物理学的認識論との同時代性のなかに位置づけることである。たしかに「アガート」の構想においてヴァレリーの問題意識の中心を占めていたのは、認識についての理論であり、どのようにすれば言語以前のレベルに存在する精神の諸現象、諸行為に正確な表現を与えることができるかであった。そのとき観察するもの(主体)と観察されるもの(客体)との区別は揺らいでしまう。ヘルムホルツ的な認識論の主要な論点のひとつが主体と客体との間の境界線のずらし、引き直しであったとすれば、ヴァレリーの試みもまた同じ位相にあったのである。しかし、ここで忘れてはならないのは、そしてこれが彼女の第二の視点になるのだが、ヴァレリーがこの探求をほかならぬ散文詩というかたちで実現しようとしたという事実である。こうした試みには、マラ

ルメという先例があったのだが、ヴァレリーがめざしたのはマラルメとは別のかたちでそれを実現することであった。絶対的散文の探求、主体と客体の融合が模倣され、それが成就したときには、いわば自らを消去してしまうような一冊の書物の構想。こうした散文はまさに一個の球体を思わせる。アガートの別の綴り *agateme* のうの球体とは、すなわち脳の比喩なのである。

4 ジャニーヌ・ジャラ(パリ第八大学)「ポール・ヴァレリーと日本の鳥」

日本の鳥とはもちろん現実の鳥のことではなく、日本の版画(浮世絵)のなかに描かれた飛翔する鳥の姿のことである。ジャラは北斎に代表される日本の浮世絵が、『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法序説』でヴァレリーが展開する「観察」の理論、「見ること」の現象学に重要な影響を及ぼしていることを、『序説』の草稿、当時の手紙、覚え書きなどを引用して論証する。公刊された『序説』ではこの影響は目立たないものにされているが、明らかに存在しているのである。それは、形をもたないものの形をどのようにとらえるか、形と運動、形と力と

の緊張に満ちた関係、言い換えれば現実的なものと芸術との関係をどのようにとらえるにかかわっており、またメタファーの理論とも交錯する。それはまた、ある種の写真がヴァレリーに与えた衝撃に通じるものをもっている。

ただし、テクストのレベルでは明らかに認めることのできる浮世絵の影響も、これを歴史的事実のレベルで確認することは以外に難しい。『序説』執筆以前のヴァレリーが一体いつ、どこで北斎などの浮世絵を目にすることうのできたのかは、わからないままであり、彼が北斎のものとしている砂に打ち上げられた怪物のような魚の絵の存在如何とともに、今後の調査に待たれていることをジャラは何度も強調した。

5 マリア・テレサ・ジャヴェーリ（メッシーナ大学）

「他者性」

ヴァレリーにおける他者性とは非常に大きなテーマであるが、ジャヴェーリはこれを作家とその作品の受容者、読者との関係という主題に特化させて論じた。近代的な意味での読者に対する意識がはじめて生じたのは一九世

紀であり、それは作品と読者との関係が商品とその消費者との関係になったことに対応している。作家は自己の作品をまず売らなければならないのである。こうした市場経済的構造は読者像として作者の意識、さらに作品の構造そのものに反映せざるを得ない。ジャヴェーリはこれをポードレルとフロベールを例にとって具体的な引用を織りまぜながら跡づけたあと、敵としての読者というテーマとしてヴァレリーの場合に帰ってくる。ヴァレリーにおける他者性は、何よりもまず自己自身の他者性、内なる他者性という意味を帯びているのだが、そのことが意味するのは彼にとって真の読者がやはり自己であるということ、未来の自分であることなのである。ひとことコメントしておけば、作品生産における読者像の問題というのは、ヴァレリーにおいてももう少し複雑な様相を呈しているように思われるのだが。

6 セルジュ・ブルジャ（ポール・ヴァレリー大学）

「リテラチュール（文学）は今後リチュラテール（草稿の大地）になっていくだろう」

ジャック・ラカンの論文を出発点に、ブルジャがめざ

すのは、精神的な視点によって(あるいは視点とともに)なされる文学概念のずらし、拡張、転回である。

こうした試みにとって文学(リテラチュール)という語の語源をめぐる考察は、貴重な立脚点を提供するであろう。リノ、リトウス、リトゥラ、リトゥラリウス、これらが意味するのは、塗りたくり、消去、削除、痕跡、下書き、草稿といった事柄であり、それらすべてがいわば文学という語のなかにあらかじめ書き込まれていると言えるのである。それはまたリトラル(沿岸)という語をよびおこすことで移動を、別の大地への旅立ちをも指し示すだろう。このような視点から、絶えざる削除や書き直しそのものに書くことの意味、快楽を見つけようとするエクリチュールとして『カイエ』を見直すならば、ヴァレリーの試みがまさに上記のような文学概念の変更そのものを実践していたと言えるのである。ブルジャはまたこうした別の、他なる文学概念の構築に日本の伝統的エクリチュールのあり方が寄与しうることを示唆した。

この大胆で野心的な発表は多くの議論を巻き起こした。に違いないが、残念ながらそのための時間はなかったともあれ、三日にわたる充実した(ある意味では充実し

すぎた)シンポジウムを締めくくるのにふさわしい発表であったことはまちがいない。

あとがき

以上で三日間のシンポジウムの日程がすべて終了し、夕方七時から立川グランドホテルでお別れの晩餐会が開かれた。晩餐会の席上、外国の研究者たちから今回のシンポジウムの組織が見事であったとお褒めの言葉をいただいたが、これはひとえに実行委員会の諸氏、一橋大学言語社会研究科の事務方および当日献身的に働いてくれたアルバイトの学生・院生諸君の努力のたまものであり、ここに実行委員長として深甚なる感謝の意を表したい。シンポジウムの成果についての真の評価は、この先、論文集が刊行され、世界の研究者の机上に置かれるようになって初めて定まるものと思われる。「あとがき」にかえて、シンポジウム開催後に時事通信社の求めに応じて書いた拙文を引用して締めくくりとする次第である。

「一橋大学主催国際シンポジウム『東と西の対話——ポール・ヴァレリーの眼差しの下に』が、一夕の講演会

と六セッションからなる三日間の全日程（九月二四日～二七日）を無事終了した。かえりみて思う成果は色々あるが、根本的な問題に限って述べると、次のようなことが言えるだろう。

第一に世界中から集まってきたポール・ヴァレリーの研究者たちが、極東を体験したことの意味である。文明評論家としてのヴァレリーに新たな光をあてることが、今回のシンポジウムの目的の一つであったが、そのためには「ヴァレリーの東洋認識とはどの程度のものであったか」という問いに参加者は答えなければならぬ。しかし、そうした問いに答えるためには、参加者自身が一定の東洋認識をもっていなければならない。参加者の東洋認識の程度が問われるゆえんである。中国系アメリカ人の比較文学者が、ヴァレリーの中国は西欧の紋切り型の域を出ないと言いきったが、多くの欧米からの参加者自身、東洋の文物に対する無知を告白ないしは露呈せざるを得なかった。その意味で今回の異文化・異言語体験は、一定の効用があったように思われる。それは彼らがたとえ東の間であれ、視点の移動をせまられたことであり、視点を移動すれば、当然、見える景色は変化する。

それによって、それまで安定していた《知》の基盤が揺さぶられるのである。

第二に同じことが日本人の研究者の側にも生じることの意味である。ポール・ヴァレリーというフランスの詩人・思想家を西欧の都市のどこかで、西欧人たちにまじって論じている限り、日本人研究者たちは自らの内なる東洋を感じない。あるいはまたそれを感じさせないようふるまう。かくして、日頃、日本語と日本文化に由来する偏差を自らの研究に組み込む習慣がないために、ポール・ヴァレリーの思想に点綴される「東洋」を掘り起こすために欧米の研究者が発する素朴な疑問（それはたとえばヴァレリーの美術論に即した議論で、「ところで浮世絵の造形とは、一口に言って、どういふところに特徴があるのか」といった疑問）に我々自身答えられないのである。かくして我々自身の研究者としての姿勢・視点にも問い直される部分があることがわかる。欧米人にとってとは勉強する内的必要を感じずにやってきた結果としての《無知》が、日本人にとっては欧米の研究様式に寄り添う努力の影におしやられて、かえりみることなくきた自らのアイデンティティーに対する《無関心》とし

て現れるのである。

対話とは、当事者間相互の相手に対する興味・関心が拮抗するときに最大限の効果を發揮するコミュニケーションの様式である。その意味で、今回のシンポジウムはある種の《挑発》であったように思われる。昼間の議論のあと、遅い夕食を街なかのレストランで一緒にとりながら、フランスからやってきた三十歳そこそこの若い研究者は自らの《無知》を反省し、できるならば、日本語を学び、日本におけるヴァレリー受容がどのようなものであるかを内側から知りたいと語った。幸い、今回のシンポジウムの開催を契機として、一橋大学に日本ポール・ヴァレリー研究センターが正式に発足する運びとなった。貴重な資料や刊行物を収集するセンターとしてのみならず、今後の「東と西の対話」の足がかりの場所となれば幸いである。」

フランソワ・ヴァレリーから寄せられたメッセージ

ージ(翻訳)

本シンポジウムを組織された人々、そして、シンポジウムに参加すべく集まって来られたすべての人々——な

かには非常に遠くからやってこられた方もおられるでしょう——に、まず、私自身がこのポール・ヴァレリー国際シンポジウムに参加できないことを衷心より残念に思っていることをお伝えしたいと思います。

パリー東京間の旅は短くはありません。それとは別に、めったにないほど盛りだくさんなプログラムを消化するために、個々の発表のテンポが当然スピードアップされることが予想され、それにもかかわらず注意深くついていこうとすれば(シンポジウムの意義はそこにあるはずですが)、途中で座を外すことも、聞き流すこともゆるされなくなるでしょう。現在の私の不安定な健康状態では、どうもそうした忍耐力と注意力の持続を全うするのはいささか無理ではないかと判断した次第です。

また、本日の開会式において、阿部謹也一橋大学長に続いてご挨拶申し上げることになっていました。それもかなわぬことになりましたが、そのような大役を仰せつかったことが私にとって名譽であることに変わりなく、学長にお礼申し上げたく思います。また恒川邦夫氏にもお礼申し上げます。氏の有能さと献身的な努力、

そして礼儀正しき、とりわけ、私が今回の旅行を断念するまでに色々思い迷った際に氏が示された忍耐力には敬服しました。ここに感謝の意を表する次第です。

私が残念に思うことの第一は、どんなに短い期間であっても、現実の日本を肌で知る機会を失したことです。

現実の日本といっても、私にとっては、まずは現在のポール・ヴァレリー通り、かつてのヴィルジュスト街（ポール・ヴァレリーが長く住んでいたパリ16区の通りの名前、ヴァレリーの死後、ポール・ヴァレリー通りと改名された）の壁にかけられていた何枚かの浮世絵によって象徴される伝統的な日本です。なかでもとりわけ父の書斎の壁にずっとかけられていた一枚、私を魅了してやまなかった一枚の浮世絵があります。水——湖か瀉でしよう——はあくまで深い青色をたたえていて、空の明るさを少しも映していないといった絵です。残念ながら、旅行を断念する代償に、目下パリで開かれているすばらしい奈良仏像展にでもでかけることにいたします。

しかし同時に、西欧が賛嘆といくばくかの嫉妬をもってそのめざましい成功を眺めている現代の日本にも興味

があります。ただ日本の奇跡といっても、ヴァレリーが生きていたら、驚くことは何もなかったでしょう。彼は色々他のことに関してもそうでしたが、日本についても、ある種の先見の明を発揮したように思います。それは彼のものを見る目の鋭さと、推論の厳密さのためものにならなれないと思われます。

私は、日本の教養人が純粋な地中海人だったヴァレリーに対して抱く関心も、また、いくらか奇跡的だといえるのではないかと思う者です。もし私が、今回のシンポジウムに参加することができたら、そうした疑問に対する何らかの回答を見つけることが出来たかもしれません。私のあまり根拠のない、したがって取るに足りない仮説では、ヴァレリーの思想と日本文化が仏教に負っているものとの間にはある種の親和力のようなものが存在するに違いないということです。これ以上この主題について申し上げるつもりはありません。おそらく知識もなしに、こんなことを言い出した私が間違っているでしょう。

以上のことを申し上げたうえで、シンポジウムのプログラムにはない一つの問題（プログラムに掲げられてい

る問題については、多分、私には口をさしはさむ資格がないように思われます)について少し述べてみようと思います。それは自分の死後のことについてポール・ヴァレリーがどのように考えていたかという問題です。この問題は、文学的遺産の相続人たちにとっては、直接自分の問題として提起される問題です。その意味でも、私がここで皆様の前で忌憚のない意見を開陳しておくことは時宜を得ているといえるでしょう。ある作家の作品があるとしましょう。法律によって、そうしたきわめて特殊な性格の財産に対してある種の裁量権を相続した者たちは、どのように振る舞うべきか、相続人たちの任務とは何か。これは私が立てた問題であり、私自身しばしば考えてきた問題です。私の結論ははっきりしています。相続人たちの任務は、一般読者、とくにその作品に興味を持つ可能性のあるすべての人々に、作品へのアクセスを容易ならしめること、それ以外には考えられません。ある種の所有権の考え方にもとずいて、純粋な無形財産にはあまり適用されないのでありますが、一般に《権利所有者》^{エイヤン・ドロフ}という言葉が使われています。私としてはむしろ《義務所有者》^{エイヤン・ドロフ}という言葉を用いた方がいいよ

うに思われます。ただし、いかにもこの新語は音の響きが悪いのが難です。真実のところ、私が強調したいのは、作者と作品に対してのみならず、作品の最終的な送り先である読者大衆に対しても、責任をもつという考え方で。もう少し厳密に言えば、作品というのは、ヴァレリーが『我がファウスト』を捧げたような、「誠実かつ意地悪な読者」に捧げられてしかるべきものなのです。読者のこのような定義はヴァレリーの気持ちをよく反映しているように思われます。ヴァレリーは受動的で従順な読者を要求しないし、のぞみません。彼は逆に自立した、時には反抗的な精神を好みます。そのかわりに彼は読者に誠実^{ホンネ・マコト}さを要求するのです。(こう書きながら、なぜか私は「信念^{フオウ}といえは十分で、ことさらに良き信念^{ホンネ・マコト}(「誠実)」という必要はない」と書いたジッドのことを思い浮かべます)誠実さとは、ここでは知的誠実さの意味ですが、それはあまねく人間に分有された性格とはとても言い難いものです。そこから、私の申し上げた義務に関して、作家が書いた物を——あたうかぎり自由な精神をもって——読者の自由に供することは、単に合法的であるだけでなく、必要であると結論することができます。

るように思います。そして相当の学者の研究書の中にまで散見される、意識的・無意識的な、さまざまな誤り——それは情報システムを攪乱し、ついには演算結果を狂わせてしまうコンピュータウィルスみたいに増殖するものです——が看過されることがないよう気をつけるのが、しかるべき能力のある人たちの任務だと思えます。

私が『ポール・ヴァレリーの三大戦間』という小冊子を最近上梓しましたのも、世間でそうした誤りが数多く、繰り返し取り上げられ、中にはまったくの作り話まであって、それが結局は一般読者のみならず、批評家たちにもまで顔面通り受け取られるようになっていくという事態を見て、ささやかながら軌道修正を試み、ある種の真実を伝えようと考えたからです。

私がただ今申し上げたことは、『伝記的事実』が『書かれた物』よりも重視される傾向が見られる今日のような時代にあつては、おそらくいっそう重大な意味を持つように思います。なぜなら、テキスト分析としてみれば、単なる曲解にしか過ぎないようなことが、作家の伝記的事実としては、えてして単純明解なる中傷的性格を帯びることが少なくないからです。かくして、そうし

た偽瞞的な操作が来り返されることによって、その相乗効果で、作家の真実が深刻に、長期にわたって、歪曲されるという事態が生じるのです。

それゆえ、世界の様々な国にいる、ヴァレリーの作品と人に興味を抱き、質の高い真剣な作品研究と確かな分析によって、ヴァレリーの真の姿を基本的な人格の統一性と誠実さにおいて構築あるいは再構築する人々の行動が重要なのです。

ヴァレリーが望んだのはたった一つのことです。他のことにはかまわず、自分自身の限界まで行くこと。ヴァレリーが作家として、ある種のオストラシスムに対して、あれほどよく抵抗できたのはそれゆえです。およそ四十年の間、とくにフランスの知的舞台の前面に登場した様々なイデオロギーのいずれにも恭順の意を表明しなかつたヴァレリーは、そのことによって、ある種の追放状態に置かれていました。彼はマルキシズムにも、フロイディスムにも、実存主義にも、さらにはもう少し限られた分野である構造主義にも、忠誠を誓うことはありませんでした。ただときにヴァレリーが持つ驚嘆すべき

予知能力^{フレンジアンズ}によって、それらのイデオロギーとヴァレリーの考えたこととの間に接点が見い出されるようなことはありましたが。

ベルリンの壁が崩壊して以来、それらの皆もくずれさりました。が、未来のことについてはまだ慎重にならざるを得ません。ただし、オストラシスムは依然残っています。通常の意味での煉獄(「作家が死後、一時期忘れられ、再び読まれるようになるまでの期間」)を体験しなかったヴァレリーですが、彼は今日なお、かならずしも意図的ではなくとも、多くの大学人から無視され、知識人層から非難されています。

しかし事態は変わりつつあるように思います。それはとくにここにお集まりのようなヴァレリーの専門家たちの熱意と業績のおかげです。ヴァレリーへの回帰というのではなく、そうしたことから大した意味はありませんが、思想家としてのヴァレリーがいかにアクチュアルな存在であるかということに人々が気づき始めたということです。ヴァレリーのモデルニテと呼ばれるものに、ある種の驚愕と共に、多くの人が目を開かれてきたように思われるのです。

こうした意識の変化をもたらした大きな要因の一つは、ヴァレリーの『カイエ』の写真版とそれに続く抜粋版の刊行でした。『カイエ』はその存在が知られていながら、実際どういふものであるか分かっていたのはほんの一二りの人たちでした。この《^{シュルゲイマンズ}超次元的》——こんな新造語を使うことをお許し下さい——「大全」をさらに網羅的に活字化して出版する計画とその膨大な編纂作業が要求する仕事、フランス国立図書館のヴァレリー文庫を、現在、ヴァレリー研究のほぼ恒常的な研究センターにしています。『カイエ』全体についてきわめて有意義な主題系を確立した抜粋版につぐ完全活字版の刊行には、ほとんど際限のない調査研究が必要です。これまでもすでにそうでしたし、今後ますますそうなるものと思われまます。探索するには時間がかかるのです(少なくとも、それを遂行するための支援が今後とも与えられ続けるとして)。支援ということについては、周知のごとく、戦前からヴァレリーの書き物を世に広めるのに尽力してくれたガリマール社と、完全活字版の実現に財政的ないしは技術的援助を与えてくれたCNR S(「フランスの国立科学技術センター」)に感謝をしたいと思います。C

NRSの援助はこれからも続くわけですが、協力する研究員たちは純粹に知的な興味だけを唯一の報酬として、ヴァレリーのために、自らをいわば世俗的なベネディクト会修道士たらしめているのです。

もう一つ私がとくに重要だと思ふ展開は、ヴァレリーの詩の草稿についての知識の増大です。私はヴァレリーが詩人であり、詩人でなくなることは決してないと考える者の一人です。その意味で、思想家としての作品と《歌う人（詩人）》としての作品の間に境界を設けることはまったく不自然であると考えます。シャイヨー宮の壁面に刻まれた銘文をもじって言えば、一方がなければ、もう一方もない、と言ってもいいくらいです。私がまづがっているかもしれない。しかし、そうした言葉の《練習》がどのように生まれてくるのかを研究すれば、アプリオリにはつきりと異なると思われる二つの創造形式の間に、親密な照応関係があることが明らかになるでしょう。『カイエ』とはポール・ヴァレリーの言語についての基本的なテーマの無限の変奏でなくて何でありましょう。そして詩はその同じ言葉を最も密度の高い形式において使用したものでなくて何でありましょう。

やや冗漫なまでに長く、しかし個々のテーマについては不十分な展開にとどまった話になってしまいました。最後に、いわゆる《ヴァレリーロジー》^{ヴァレリーオロジー}というものに戻ってしめくりたいと思います。ヴァレリー学はまだ公式には認知されていない学問のようです。認知されていたら、皆さんはさしずめその講座の教授席にお座りになっておられるでしょう。にもかかわらず、ヴァレリー学は次第次第に国際化されてきたのみならず、制度化されてきたように思います。様々な国に常設のヴァレリー研究センターが設置されてきたのもその一つの現れでしょう。まづ皮切りにモンペリエに設置されました。その活発な活動には敬意を表します。英国にも設置されました。ヴァレリーは生涯英国に愛着を感じていました。とくに若き日に、当時の文壇の重鎮の何人かに会ったロンドンに。そしてローマのセンター。ヴァレリーの体に文字通りその血が流れているイタリアのセンターです（ヴァレリーはジェノヴァに生涯消えることのない青春時代の思い出を持っていました）。その他にも色々な国にセンターが設置されています。脱落があっては失礼にあたりますの

で、ここでは敢えて列挙することはいたしません。ただロシュトックのセンターについてだけは一言述べないわけにはいきません。活動が活発であるというだけでなく、ヨーロッパ人であるヴァレリーにとって、ドイツに、しかもほとんど象徴的に、旧東ドイツに自分の研究センターが設置されることの意味深さを思うからです。

問題は一人の人間、詩人、思想家を擁護することではありません(ヴァレリーにはそうしたことをする必要はないと確信しますし、そういうことは問題になりません)。まったく別のことです。問題はいかにして彼の膨大な探究と内省の努力の軌跡に、彼自身がどのぞんだ形を与えられるかということです。『カイエ』の最後で、

自ら自分の探究の成果と呼ぶものを念頭において、ヴァレリー自身希望を述べています。それは自分が考えたことがさらに他者の知的意識の中で生き続けてほしいということですが、それも専門の研究者の意識のなかでだけというのではなく、それぞれ異なった専門領域で傑出した人たち、高いところまでいったがゆえに本当の意味の普遍主義者あるいは言葉の完全な意味における哲学者になつたような人たちの意識のなかで生き続けてほしいということですが、ラングドックの小さな港が奇しくも生んだこの特異な偶像破壊者もまた、結局するところ、そうした意味の哲学者なのです。